所謂「成吉思汗碑石」に對する諸研究に就いて

——クリューキンの論文の翻譯紹介を中心として——

愛宕松男

一、はしがき

元朝中期の文献と稱する"Jirüken-ü tolta yin tayi-lburi"乃至之に依據せる蒙古・西藏史料を基として、蒙古族の間に於る文字の歴史を一二四七—一二五一年の間に於てラマ僧 Sa-skya Pandita に始まるとする見解は今日なほ絶無ではないけれども、而も其が謬見たる事は論を俟たない。十三世紀中葉、蒙古人の畏吾兒字採用を言ふカルピニ、ルブルッキーの記錄は年代的に此問題解決に資し得ないとするも、太宗脱列哥那皇后監國四年の日附を持つ山東朝城縣「興國寺舍利塔令旨碑」(山左金石志卷二十一)或は太宗七年の令旨を刻す陝西鄠縣「重修草堂寺碑」(錢大昕金石文跋尾卷十八)には已に蒙古字(畏吾兒字)使用の事實が傳へられて居る。就中、一九二〇年バチカン古文書中に於てペリオ等の發見に係る法王インノセント四世宛グユク汗の書翰——之は波斯文で書かれ一二四六年の日附を持つてゐる——には、現に六行よりなる蒙古語畏吾兒字の印璽が認められて居るのである。蒙古字の歴史が更に其起源を過去に求めらる可きは明かである。されば成吉思汗の畏吾兒字採用を一二〇四年乃蠻征伐中の一挿話として記載する元史塔塔統阿傳は、此の點當時の情勢と併せ考へて容認さる可きであらう。少くとも、漠北を一丸とする統一的部族制國家の成立が西方ウイグル文化圏との間に開始しはじめた統制的、秩序的な直接交渉と呼應して、或は内面的要求として或は客觀的必然性に於て、畏吾兒文字採用を當時に實現せしめた事のみは之を承認せねばならない。國初蒙古王族の師傅として登用された

畏吾兒人哈剌亦哈赤北魯・岳璘帖穆爾・庫爾吉司等の事績は此の斷定を裏づけるものである。

現存する古代ウイグル蒙古文字の文獻は其數甚しくは尠しとせない。諸汗國の貨幣を除外するも、イル汗アルゴン、ウルジヤイツーよりフランス王フィリップ四世宛の一二八九年・一三〇五年附書翰（バリ國立古文書收藏所所藏）、一八四八年ドニエプル河畔出土、金帳汗國アブヅラー汗（一三六二―）の銀牌（レニングラード學士院所藏）、元統三年（一三三五）至元四年（一三三八）の張應瑞・竹溫台の碑、一三四五年の居庸關の碑、一三九三年、金帳汗國トフタミシ汗の詔勅の如き其の代表的なものたり得るであらう。唯それ上記畏吾兒字採用の當初に近き漠北時代に屬するものに至つては、著しく其數を局限せられ、纔に上掲一二四六年のグユク汗の印璽及び其自身明確なるデートを缺くも而も成吉思汗の晩年、少くとも現存せる最古の蒙古字文獻として諸說一致する所謂「成吉思汗碑文」の二つを數へるに過ぎない。されば本紀念碑の有す重要性は單に其が蒙古語の最古の雛型であり又蒙古人の殘せる最古の文獻たる點に於てのみならず、更に蒙古帝國初期の文化現象に直接間接關與を有する點に認められねばならない。然るにも不拘、本碑文の解讀は年月による碑面の磨滅破損其他の惡條件に災せられて、決定的な解決をなほ將來に殘すの現狀に止まつて居る。嘗て新しく提出是認された解釋にして次で反對否認せられ、或は前に一度は反駁せられながらも再び支持贊同せられた見解も少くはない。されば一應こゝに從來の論說の經過を通觀し其結果を整理して以て今後の研究の完成を待ちたい。

尤も本紀念碑に對する研究と云つても學術的主題的に之を取扱つた限り、シュミット「蒙古人統治時代の最古の一碑文に就いて」(I. J. Schmidt : Bericht über eine Inschrift aus der ältesten Zeit der Mongolen-Herrschaft. "Mémoires de l'Académie des Sciences de St.-Petersburg". VIe serie. vol. II. 1834) に始まりバンザロフ「成吉思汗の甥イスンケ大公碑の蒙古碑文の解釋」(D. Banzarov : Obyasnenie mongol'skoi nadpisi na pamyatnikui knyazya Isunke, plemyannika Čingis-Hana. "Čornaya vera". SPb., 1891) クリューキン「ハルヒラ石（成吉思汗石）に刻せる最古の蒙古碑銘」(I. A. Klükin : Drevnyeišiaya mongol'skaya

nadpis' na Harhira'skom (Čingis-hanovom) kamne. "Trudui gosdarstvennogo dal'nevostočnogo Universiteta". seriya VI. No 5, 1927) に終る三篇を數へるに止まる。而もシュミットの研究は寧ろ單なる翻譯とも稱す可きものに過ぎず、バンザロフの論文又近時播磨檜吉氏の翻譯（善隣協會調査月報、七九）を得て從來の如き參照の困難より解除さるゝに至つた。是れ本篇が「成吉思汗碑石」の諸研究の展望を題しつゝ、勢ひ專らクリューキンの論文の紹介翻譯に終始するに至つた所以である。

二、碑石と碑文

所謂「成吉思汗碑石」と稱せらるゝ紀念碑が學界に紹介せられたのは一八一八年に始まる。シベリア研究家スパスキー Spasky は同年「西比利亞通報」Sibirskij Vestnik 誌第四篇に次の如き報告を爲して居る。

「アルグン河 Argun 左岸に注入する一支流、ウルリユング河 Urulyung の北方には花崗岩質の山々が一面の森林に覆はれて居る。然るに此等高地より〔南方〕半日行程、支那との國境地帶に至れば廣濶なステップが展開する。此山地に發源しウルリユング河に向つて流れる數條の小川は孰れも途中、流砂の間に消失して一もウルリユング河に達しない。此等諸川の中、クィルクィル川 Kuirkuir 及びマラーヤ・コンヅーヤ川 Malaya Konduya の沿岸には前代の住民の建造にかゝる若干の建物の遺跡が存したが、其等は已に大分以前に發堀せられ、唯クィルクィル川沿岸の遺跡のみがなほ未調査のまゝに殘されて居る。併し余が入手した見取圖に依れば、此等遺跡は互に九十サゼーン（約二百メートル）の間隔に在る事が推知せられる。遺跡中の土壘・土堤の或物は樣々な又奇異な方向を具へて居るが、併し其の四角形の外觀よりすれば其等は柵の土臺であつた事が偲ばれる。

クィルクィル川の上流、此等の遺跡より五露里の地點に若干の古墳群が存在する。一部の人々の確言する所に依れば、東洋文字の碑文を刻した巨大な花崗岩碑石が存したのは此の古墳群の側であつたと。併し他面、之に對して大部分の人々は本碑石はコンヅー川沿岸の遺跡發堀の際に發見せられた諸紀念碑の

一であると主張する。」

其後ロシア帝室學士院會員シュミットは一八三三年三月二十二日アカデミーの公開講演に於て、右スパスキーの紹介並に當時親しく現地に赴いた學士院書記シルリング・フヲン・カンシュタート Schilling von Canstadt の報告に基き、本碑石發見の事情を大約左の如く發表した。

「支那との國境に近きウルリュング河の一支流、マラーヤ・コンヅーヤ川—現今蒙古人・ツングース人は之を Chondai 川と稱して居る—の畔に廢墟が在る事は以前より知られて居た。嘗て、此地より四露里のコンズーイスカーヤ村 Sloboda Konduiskaja の住民が何か利得を當にして、之が發掘に從事した事があつた。彼等は終に廢墟を覆つて居た灌木・芝草の下から長さ四十三尋 Faden・巾二十三尋の建物の遺跡を堀り出した。建物の內部には龍其他怪獸を彫んだ花崗岩の石塊—此等は併し支那風なものではなかつた—其他花崗岩の切石等が包藏されて居た。此等出土品は其後村民の手により悉く一寺廟建立の材料に使用せられたが、僅に怪獸の形をした石塊一個と此處に問題とせる蒙古文字を刻した碑石のみは、幸にも難を免れてネルチンスク市に移送せられた。」

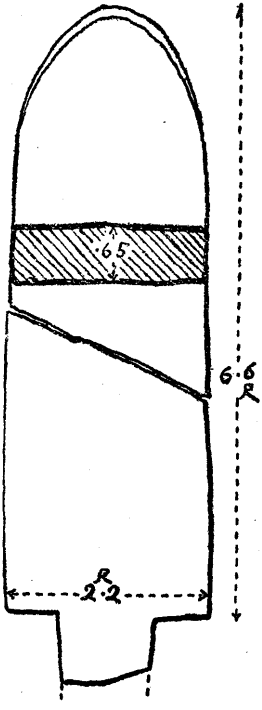
要するにコンズーイスカーヤ村民の手によりマラーヤ・コンヅーヤ河畔に發見せられた本紀念碑は、其後一旦ネルチンスクに移されたが程なくスパスキーの努力に依つて一八二九年當時の首都ペテルブルグに移管せらるゝに至つた。現今レニングラードのアジア博物館正面の壁間を飾れる碑石は乃ち是である。因に該地の詳細なる地形圖はクズニェツヲフ「コンズーイスカーヤ村及び其附近に於る廢址」(A. K. Kuznetsov: Razvalinui konduiskago garodka i ego okrestnosti, Vladivostok, 1925) に掲載されて居る。

碑石は、昭和五年九月親しくレニングラードに在て調査せられた本學助教授梅原末治氏の言によれば、面の粗なる花崗岩切石であつて、頂部は不均齊な弧狀を爲し下部に方形の要石(カナメ)を有すると。左に掲ぐるものは同助教授を煩はして得た實測圖である。

碑石面には五行より成る碑文が刻まれて居る。第一行の極めて短い行は表題として他の四行より高く、蒙古人大帝成吉思汗の名前を記す。同樣に第四行も又前

の兩行・後の一行よりは高く而も第一行よりは低く頭書され、本碑文の主人公たる成吉思汗の甥諸王也松格の名前に始まる。最後の行は半行に過ぎない。全五行を通じ二十の用語（バンザロフ、シュミットは二十一語）、他に接尾語六、句讀點二が使用されて居る。

碑石は周知の如く、ネルチンスクに運搬の途上破損を蒙り上下の二部に切斷せられた。碑石面を左側中央部より斜に右下に走る直線狀の割目は此結果生じたものである。此龜裂に關しシュミットは「幸に碑文には何等の損傷をも與へて居ない」として居るが、事實は決して左樣ではない。碑文の第二行第三語は爲に其の語頭の字母を失ひ、第三行第二語も又語中に於て若干字母を湮滅せしめられて居る。此等の破損、就中第三行第二語の其は、之を bogaorgai「凡ゆる不和」Buga Sučigai と二語に判讀せしシュミット、バンザロフに對し、新に之を bogtogočigar「競技の相手」の一語とするクリューキンの見解を提出せしむる餘地をすら與へたのである。而も問題は單に一語の解釋の相異のみに止る可き性質のものではない。シュミット以下全然意味を異にする三樣の翻譯が多かれ少なかれ其原因を之に發して居る事は否めない事實である。



三、碑石の名稱

キヤフタ市 Kyafta の蒙古語教師ブリャート人ワンチコフ Vantikov が本碑銘に最初の翻譯を施したる際第一行に銘記さるゝ蒙古人大帝 Činggishan の名前に因んで之れに賦與した「成吉思汗石」なる名稱は、其後蒙古學者の間に於て無批判に採用せられた。彼等の此の態度は孰れも其の根底に於て、碑銘は直接成吉思汗の事績を叙述して居り碑石は彼の意志に基いて建設されたものとの確信を前提とするものでなければならない。吾人は其の代表的な例として、之を「成吉思汗に關する紀

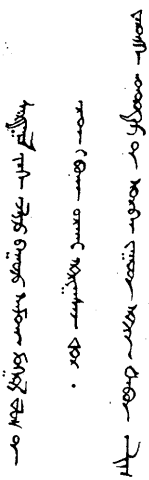
念碑」"Denkmal von Tschinggis Chan"と言へるシュミットに見るであらう。即ち彼は明確に次の如く斷言して居る。「本紀念碑の貴重なる所以は、唯に其が成吉思汗の建設に係ると云ふ點のみに止らない。蒙古字の最古の標本として、更には又蒙古人の精神發展の最初の成果として尊重すべき物である。……一二一八年成吉思汗はカラキタイを完全に征服した。從つて此の重大な且決定的な事件と關係附けられる本紀念碑の設立年代は、一二一九年又は遲くとも翌一二二〇年になければならぬ」と。シュミットに於てはサルタグールとカラキタイとが混同せられて居り、從つて之れに基く彼の紀年は全然誤つて居るけれども、兎に角上記する二個の既定條件に立脚せることだけは明瞭である。

然るに此見解は一八五一年ブリャート人バンザロフによつて眞向から反對せられた。碑文の內容は「成吉思汗によるオノン河流域部族の征服」でもなければ「成吉思汗の惡魔追放」でもない。其所に見ゆるものは、一二二四年成吉思汗の甥イスンケが西域征伐の戰功により受領した分地分民の記錄である。從つて碑文の主人公は成吉思汗ではなくして其甥也松格大王であり、碑石は其の紀念事業であつた、とするのが其の主張である。是に至つて碑石の名稱は自ら一變せざるを得ない。代つて彼の提唱した新名稱「成吉思汗の甥イスンケ大王碑」は率直に如上の見解を表明するものと云へるだらう。要するにバンザロフの新見解は、從來yerünke「全體として」と判讀され來つた第四行第一語に別個の讀方 Isünke を決定し之を拙赤合撒兒の子也松格に比定する立場より當然展開する一結論であつたのである。之に對し、少くとも本語に關す限り同一見解に立ち乍ら而も相容れざる結論に到達した者はクリューキンであつた。

碑文の內容は「決してイスンケに對する分地分民の記錄ではなくして、戰利品分配の爲に蒙古人が開催した射擊競技の記錄である」と確信したクリューキンに於ても、バンザロフの提出せる Isünke なる讀方は否定されたのではない。其は決定的な主張として支持されて居る。唯前者に於てイスンケの影に全く姿を沒して居た成吉思汗自身の役割が後者に於て再び其主要性を回復した點に兩者の結論は分岐するのである。

クリューキンは「成吉思汗碑石」なる名稱に對して全然拒否の態度は採つて居ない。其は彼が碑文より解讀した射擊競技を目して恐らくは成吉思汗自身の司會・審判に係るものと測定し、此想定の下に碑文と彼との直接關係を容認したが故である。而も他面、彼は碑石が「何時」・「何處に」・「誰により」建設されたかの問題は之を斷定し得ないとの見地より、發見地に因む「ハルヒラ碑石」―ウルリュング河左岸に注ぐ支流は現今ハルヒラ川と稱せられて居る―の名稱を以てより適切なりと斷じた。要するにバンザロフ、クリューキン兩者の見解の對立は、一に Isünke なる語が碑文全體の上に演ずる役割の評價の相異に歸着するのである。此點クリューキンの說は一見穩當なるの觀を呈示する。併し乍ら少くとも碑文の示す Isünke を以て諸王也松格に對應すると爲す限り、彼の見解は餘りにも實證主義的に過ぎ懷疑的なりと評し得られないだらうか。蓋し碑文がイスンケの事績を記すのは、後述の如く其主文章に於てであり又碑文の發見せられたクィルクィル河畔は明確に拙赤合撒兒・也松格父子の分地に屬するの地域であつたから。

四、碑銘のコピー

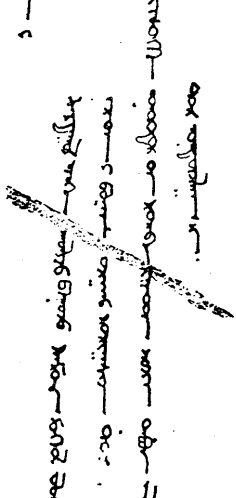


（第一圖）
シュミットのコピー
（ロシア帝室學士院報告所收）

碑文の判讀に正確な拓本が必要なるは言を俟たない。不幸にして本碑文の研究者達は技術の點より拓本の使用を行はなかつた。彼等は直接碑文に賴り或は其のコピーに基いて其研究を遂行した。されば彼等の研究を問題とする場合、其のコピーは先づ批判されなければならぬ。

本碑文のコピーは一八一八年「西比利亞通報」に附錄せられたスパスキーの其を最初とする。尤も之は作成者スパスキー自身蒙古文字に通じなかつたが故に全く無價値なものに止まつた。事實シュミット以前に存

在したコピーの種類は數種を下らなかつたけれども、其等は孰れも甚しく不正確にして互に一致する物は一も存しなかつた。一八三四年シュミットの發表したコピーは、かゝる當時の狀態裡に於て完全に近く評せられたのも當然である。（挿圖第一參照）シュミットに次で碑文の解讀を試みたバンザロフに於ても彼自身の手に成るコピーが存した。（挿圖第二參照）彼の論文の序に於てサヴエリエフ P. Savel'ev はシュミットのコピーに比べて其が著しく正確である旨を强調して居る。併し乍ら兩者の製作方法を考慮する時、本質的な優劣はつけ得られない。蓋し前者が專ら目測に賴りたるに對しバンザロフは透明な紙片を碑面に當てゝ原文の描寫を計つたと云ふ程度に過ぎなかつたが故である。却てクリューキンなどに言はしむれば、「シュミットは文字を多少角ばつた形に寫したとは云へ、バンザロフに比べ遙に多く古代文字の特色を保存した。彼は僅に二個の語形を誤つたのみなるに對し、バンザロフに在ては若干の語形の破損以外に多くの場合字母の側に附された區別發音符號を全然寫さなかつた」と、其のより粗笨なる狀態が指摘されて居る。

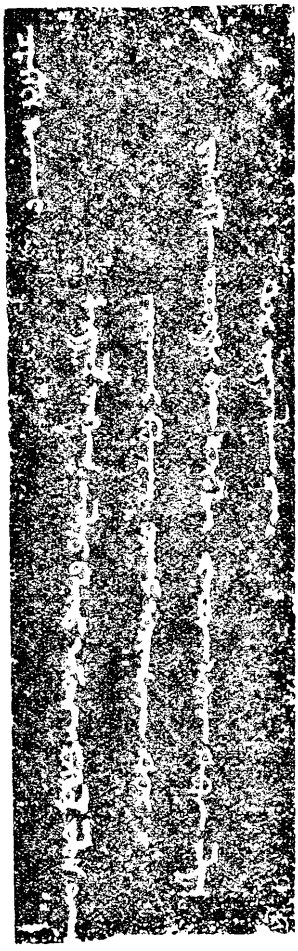


（第二圖）
バンザロフのコピー
（善隣協會調査月報 播磨氏譯文所揭）

此等一群のコピーに對して、全然其製作方法を異にする碑文の複製が最後に提出せられた。一八九二年ラドロフが其の「蒙古遺物圖錄」（W. W. Radloff : Atlas der Alterthümer der Mongolei. SPb, 1892）圖版四十九に揭げた物が其である。（挿圖第三參照）此複製はペテルブルグのアジア博物館所藏に係る碑石の銅版に基いて作成された物であつて、「より以上碑文の明細を求める事は不可能である」とする作者の自信に背く所がない。極東に在て其研究に從事したクリューキンは、專ら此銅版寫眞をテキストとして其考證を組立てたのである。從て若しラドロフの

複製が發表されなかつたなら、又よし發表されたとしてもかゝる信憑す可き製作過程を具へて居なかつたならば、碑文の原文に直接當る機會を持たないクリューキンの論文は完成しなかつたであらう。

幸にして本學東洋史研究室には、梅原助教授が露都留學中に自ら拓出された拓本が藏せられて居る。恐らく現存する唯一の拓本であつて、本碑文研究の最も貴重なる資料と考へられるが故に圖版として之を掲ぐる事にした。(圖版第三)比較してシュミット以下のコピーの確實性が識別されるであらう。



(第三圖) レニングラード亞細亞博物館藏 チンギス・カン碑銅版 (ラドロフ「蒙古遺物圖帖」收)

五、碑銘の解釋

最近迄に發表せられた碑銘の翻譯は計五種を數へる。最初碑石がコンヅー河畔に發見せられた當時已にシベリアに於る通譯者ラマ僧達は之を斷片的に判讀して居た。

「成吉思汗……時に從つて……全蒙古民族……」

次で一八三九年キヤフタ市の蒙古語教師ブリヤート人ワンチコフによる翻譯が發表された。乃ち

「成吉思汗がサルト民族を占有し而て全蒙古民族を古の屯營地に合併する事を許可したるの時、概してオノン河畔に存る者共は三百三十五人の使者の爲に征服せられたり。」

此翻譯は當時ペテルブルグ市に開催中の產業博覽會に碑石と共に陳列された說明書丈に、碑文の音譯も無く全く單なる翻譯に過ぎなかつた。此點一八三四年ロシア帝室學士院會員シュミットの提出せる論文 "Bericht über eine Inschrift aus der ältesten Zeit der

Mongolen-Herrschaft" は、縱令其年次に於てワンチコフの其に先行す可きものとするも、而も簡單ながら碑文を學問的に取扱つた最初のものとして自ら類を別にして論ぜらる可きものである。彼は碑文の音譯に於て唯第四行第二語に對してのみ空白を殘した。併し此語に對して彼は全く推測をも斷念したのではない。彼は其が個有名詞の生格形であるといふ確信と恐らくは本碑石の建設地を意味するならんとの推測の下に、可能なる三樣の綴 Chondodur-un, Chondojor-un, Ononodur-un を提出し、中に於て前二者を最も採る可きに近しと判斷した。蓋し Ononodur-un より類推さるゝオノン河は本碑發見地に餘りにも遠隔に過ぐるに對し、Chondodur-un, Chondojor-un は碑石に關係深きコンヅーヤ河に一脈の連關を求め得らるゝとの理由によるのである。第四行第二語を除く碑文の全體に對して、彼は其等が孰れもアルゴン、ウルジヤイツ兩汗の書翰並びにイル汗國・欽察汗國の貨幣に見ゆる語と殆ど異る所が無いとの理由を以て孰れも「短時日の間に解釋する事が出來た」と稱し其の音譯を發表した。

Čiŋgis han-u
Sartagul irge ejeleju bagoju hamuk moŋgol olos-un erteni boga orgai horiksan dur
Yerüŋke ……-un gurban jagun gučin tabun eliye dur sindural gan.

「サルタグールの民を征服し了へて歸國し、從前より全蒙古民族の間に蟠居せし不和を完全に解消せしめたる時、……の惡魔總計三百三十五に對し成吉思汗により追放の印として。」

彼の下した歷史的解釋は次の如きである。往時より全蒙古部族間に蟠居せる不和とは歷史的に認めらるゝ金朝・カラキタイ王國—シュミットは蒙古人の稱してサルタグールと云へるものはカラキタイに相當すると考へた—の蒙古遊牧民に對する離間政策を意味する。而も蒙古人は此現象を eliye 乃ち空中を飛翔しつゝ不和・怨恨の種を蒔く鳥身女面の惡魔の業なりと見做した。本碑石は實にかゝる蒙古人の シャーマニズム的遺物であり、其建立はカラキタイ征伐との關係より當然一二一九—一二二〇年に繫けられねばならぬと。

併し乍ら以上の如き シュミットの見解は歷史的にも文法的にも支持され得ない事は、バンザロフの反駁に

盡きて居る。乃ち蒙古人に在てサルタグールとは回教徒特にクヴァラーズム王國を意味する。事實カラキタイ攻略の當事者は哲別であつて一二一九開始された成吉思汗の西征は實にスルタン・ムハメツドに對するものであつた。是れ其の一である。其の二は彼の翻譯其物に認めらるゝ不自然さ、即ち Sinduralgan（追放）なる名詞に終る彼の譯文はバンザロフ、クリューキンが共に「碑銘の末端には動詞が來なければならない。蒙古語に在ては名詞を以て完全文を完結する事は全くあり得ないから」と指摘せる如く永久に完全文たり得ない點である。

シュミットの說を徹底的に摧破して全く獨自の新見解を樹立したバンザロフに依れば碑文は次の如く理解せられた。

Čingis han-i

Sartagul irgen taulilju bagoju hamuk moŋgol olos-un arat-i Buga Sučigai huriksan dur

Isuṅke Koŋgodor-un gurban jagun gučin tabun altak dur onduulaga.

「成吉思汗がサルターグル民族（ヒワ人）に侵入後歸途に就き、而て總ての蒙古諸種族の人々がブガ・スチガイに集合した時、イスンケはホンゴドールの軍人三百三十五〔人〕を采地として受領しき。」

彼の新解釋は、勿論相當の古文字學的・言語學的考證を其の基礎として居る事は確である。併し乍ら他面彼の研究に於ては歷史的證明がより以上の部分を占むる事を忘れてはならない。バンザロフの考證はクリューキンの論文に詳細に引用批判されて居る關係上、次節、クリューキンの研究の抄譯中に包括する事にし、此所には專ら彼の歷史的註釋を紹介したい。

彼は先づドーソン「蒙古人史」中に（卷一、三、二三頁）次の一節を發見し、

「成吉思汗は一三二四年の夏より冬にかけて〔凱旋〕途上に在り。……其後彼は Bouca Soutchicou に於て軍隊の爲に饗宴を開き、一二二五年二月其のオルドに歸着した。」

其が年次・內容・地名を總じて、碑文の副文章に對して抱ける彼の豫想に一致せるを確信した。碑銘の從屬文、特に第三行第二語に對する Buga Sučigai なる判讀・並に其が上記の地名 Bouca Soutchicou に同一な

りとの解釋は其結論「此碑銘には其地に於て蒙古のクリルタイが開かれたとドーソンよりも一層精確に表現されて居る」と共に此確信に基く決定に他ならなかつたのである。

次で彼は此碑文の主人公イスンケを歴史的人物中に物色して、遂に拙赤合撒兒の子也松格に求めた。蓋しラシード・アル・ディン「年代紀彙集」にヂュチ・カサール、イスンケ父子の分地として指定さるゝ蒙古の東北端、Argun, Hailar 河、Kula-nor 湖の境上とは、本碑石發見地に符合するに近き事が其理由の一であり、成吉思汗よりヂュチ・カサールの三子也古(エグ)、也松格(イスンケ)、禿忽(トゲ)に賜與された各一聯隊の軍隊を以て一千人隊を合成したと云ふ所傳が又碑銘の示す三百三十五戰士の分配に數量的に矛盾せざる點を第二根據とするものである。續いて彼はイスンケの獲得したる軍士とは當然當時アルグン河畔に遊牧せる部民なる可しと如上の解釋を展開して、ホンゴドールの名を第四行第二語に適用し、最後に「イスンケ大王碑石」が彼自らの手によりクィルクィル河畔の館の傍に建立せられし年代を想定して「イスンケが死する稍以前」となし、之に一二二四—一三〇〇年(一二三〇?)のデートを與へたのである。

以上バンザロフの歴史的證明を考察する時、先づ銘記されねばならぬ事は、彼が碑文の第四行第一語にイスンケなる讀方を確定し、其が拙赤合撒兒の子移相哥大王に相當す可きを證明すると共に從來「成吉思汗碑石」の名稱の下に誤解され來つた內容を訂正した功績であらう。其にも不拘此の歴史的解釋には多くの無理が潜んで居る事を忘れてはならない。例へば碑石建設年次を決定するに當り、成吉思汗の一族諸子に對する分封は一二二四年に初まり以前には在り得ないとか、イスンケ(祕史に也松格・元史憲宗紀に赤孫哥・世紀祖に也先哥・也相哥・世系表に移相哥大王とみゆ。)の晩年は一三〇〇年頃(バンザロフ說を紹介せるラウフェルは之を一二三〇年と記す。併しバンザロフは他所に於てイスンケが憲宗卽位の式に列席した事に言及して居るから、彼がイスンケ晩年を一二三〇年と斷じたとは考へ得られない。播磨氏の譯文には一三〇〇年と示されて居る。一三〇〇年(大德四年)は又餘りに遲きに失する。蓋しイスンケは中統・至元の初に七十五歲であつた(元史譯文證補)と傳へられるから。)に相當するとか言へる謬見乃至 Buga Sučigai, Bouca Soutchicou の比定—比定と言ふよりは寧ろ Bouca Soutchicou の文献の故に無條件に Buga Sučigai なる讀方を決定したと評す可き—の如き其の最も尤なるものであらう。

後來彼の說に對する非難が期せずして此の方法論に集中されたのは理由なきものではなかつたのである。ポズドニェエフの其は典型的な一例でなければならぬ。「蒙古文學史講義」(A. M. Pozdoneev: Lekčij po istorii mongol'skoi Literaturui. 1896—7) 中に彼の下せる批判は次の如きである。「バンザロフの歷史的解釋を考察するに、余は彼の提出せし歷史的證明が殆ど批判に耐へ得ぬものなるを認めるのである。蓋し彼は碑文其物に依て歷史を說明する事なく、反つて顯著な歷史事實を以て碑文其物を解說せんとした爲である」と。されば ラドロフに於ても (W. W. Radloff: Atlas der Alterthümer der Mongolei. 1892) ペリオに於ても (P. Pelliot: Les systèmes d'écriture en usage chez les anciens Mongols. "Asia Major" 1925) はた又ラウフェルに在ても (B. Laufer: Očerk mongol'skoi literaturui. 1927. trānsl. by V. A. Kazakevič from "Skizze der mongolischen Literatur" 1907) 彼の解說に對しては未だ不完全なりとの斷定が一樣に下されて居るのである。

バンザロフの此研究を反駁改訂せんとして最後に提出された翻譯はクリューキンの其であつた。彼が「イスンケ碑石」なる名稱を斥けて「ハルヒラ碑石」乃至「クィルクィル碑石」なる題目を揭ぐる態度に其の一端は已に表明されて居る。彼は極東に在て碑文の原文に接する機會を持たなかつたが故に、專らラドロフの手に成る銅版寫眞に依據せざるを得なかつたのではあるが、而も此の銅版寫眞たるや、旣述の如く、其の製作過程に於て目測又は之に類するシュミット・バンザロフのコピーに比べ寧ろより科學的な性質を保持して居た。而も彼が結論に於て、本碑石が漸く75パーセントの解決に達し得たらうと爲し完全な解決を斷言するを保留する用意を怠らなかつた愼重さは、碑文解讀に當つても專ら歷史的證明に重心を置けるバンザロフの態度を排して、一に古文字學的文法的方法に賴つた態度と相俟つて其の主張を可及的に高く評價せしめるものであらう。

Činggis han-i

Sartagul erhe tāguliju baguju hamuk moňgol olos-un noyon-i bogtogočigar (?) horiksan dur

Isuňke ontodor-un gurban jāgun gučin tabun aldas

dur ontuduluga

「成吉思汗がサルタグール政府を征服して歸還し、蒙古部族の全ノヤンをして弓の射擊競技を行はしめし際、イスンケは距離三百三十五尋(アルダス)に於て標的を射當てたり。」

所謂「成吉思汗碑文」を是の如き內容として解讀したクリューキンは更に次の如く其理解を敷衍した。乃ち「此競技會は卷狩の熱愛者たりし成吉思汗の司會審判に係り恐らくは前後七年に亘る西征の勝利を祝して其鹵獲品の分配が賭けられたものであつたらう。碑文は此競技會に於て拙赤合撒兒の子也松格が樹立した新記錄を紀念する爲に司會者が命じて作成せしめたものと推測される。今文獻の示す從來の射擊距離レコードを按ずるに、先づキヤン・ボルチギン族に於ては「大弓を以てすれば九百步の遠距離に命中せしめ小弓を以てするも尙五百步の外に的中」せしめた拙赤合撒兒を屈指の射手とするをはじめ(パラジイ「成吉思汗に關する蒙古舊傳」北京ロシア傳道師報告・四・一〇七頁)コンスタンチノープル隨一の射手スルタン＝ムラド＝ガジス四世に一二五五呎(シュテルン「南部ロシア出土の新碑石」オデツサ協會報告・二)、古代ギリシア人には一六九二呎(セスタコフ「本學考古學史上に於ける二時代」極東大學々報・十四)の記錄がある。一尋(アルダス)を以て最小六呎・三步に見積れば拙赤合撒兒のレコード三百尋(アルダス)は一八〇〇呎、イスンケのレコード三三五尋(アルダス)は二〇一〇呎に相當する。イスンケの技能が紀念碑の設立に値する事は理由なしとはせないであらう」と。

彼の說を通じて指摘し得る疑問は尋(アルダス)の換算である。乃ち彼の引用せる上記拙赤合撒兒のレコードは、パラジイ譯元朝祕史(A. Palladii: Starinnoe mongol'skoe skazanie o Čingishan. "Trudui členov rossiiskoi duxovnoi missii" Tom. IV)には正しく九百步と譯されて居るが、祕史の原文は之を也孫札兀惕 阿勒答 yisun jaguut alda[s] 乃ち九百アルダスに作つて居る事である。尤も明譯が之を九百步に譯すより推して、パラジイの譯の由來は推定されるのであるが、而も其譯の不適切なる點は否む可くもない。此點那珂博士の譯「九百尋」に從ふ可きである。かく論じ來る時、クリューキンの一アルダン＝六呎の說は當然更に縮少さる可く從つて其主張も又變更を見ねばならない。乃ち「上記トルコ人・ギリシア人のレコードが孰も單なる遠矢の其であつたのに對し、イスンケのレコードは實に命中

距離の新記錄であつたのである」と。彼は續いて、成吉思汗より箭筒士の長に任命された也孫帖額（Palladii: Ibid. P. 126, 129)を以てイスンケ—即ち拙赤合撒兒の子也松格—と同一人に非るかと想像を試みて居るが之はあく迄單なる想像に過ぎない。兎に角、「何時」「何處に」「誰により」碑石が建立されたかの決定を保留せるクリューキンに於ては、推測と考證とが截然區別されて居る點に特徴があり長所が存すると評し得られるのではなからうか。

六、クリューキンの研究

著者クリューキンはヴラジヴォストークの國立極東大學東洋學科助教授にして其の蒙古語に關する研究としては、「蒙古・ブリャート人の詩歌に現はれたる倫理的要素」Etičeskie elementui v Poezii mongolov i buryat. "Jizn' Buryatii" No. 9—12, Verxneudinsk 1925,「イル汗アルグンよりフィリップ・ベル王に宛てた一二八九年附書翰の內容」O čem pisal Il'-han Argun Filippu Krasivomu v 1289 g., Vladivostok, 1925,「現代蒙古語・蒙古字研究の爲の解說」Klyuč k izučeniyu jivoi mongol'skoi reči i pis'mennosti. "Trudui gosudarstvennuii dal'nevostočnuii Universitet. ceriya VI, 2, Vladivostok 1926,「イル汗ウルジャイツよりフランス王フィリップ四世・英國王エドワード一世及び特に十字軍士に送りたる書翰」Pis'mo Uldzeitu il'-hana k Filippu Krasivomu, Eduardu I-mu i pročim krestonostsam. "Trud. Gos. Dal'nevostoč. Univers., ser. VI, 2. Vladivostok' 1926 等が知られて居る。此所に紹介せんとする「成吉思汗碑石」に關する彼の論文「ハルヒラ碑石(成吉思汗碑石)に刻されたる最古の蒙古碑文—蒙古文字による最古の碑文の分析の爲に—」が國立極東大學學報六卷五號誌上に發表されたのは一九二七年の事であつた。併し之は云はば改正版とも云ふ可きもので、其の第一次研究論文は結局未發表に終つたけれども已に一九二五年完成せられて居たのである。と云ふのは同年之が提出を受けたブリャート蒙古共和國學術委員會が最初レニングラードに於る之が出版を約したに不拘、其後或事情の爲に之を履行しなかつた。蓋し論文中、前にシュミットに對して加へられたバンザロフの痛烈な反駁をクリューキンが再批判せる箇所

が同じブリャート人學者達の感情を害したのである。剩さへ彼等は著者の再三の要求に對しても原稿の返還すら肯んじなかつた。クリュキンが再び論文を作製せねばならなかつたのはかゝる經緯の結果であつた。併し乍ら此際彼はウラジミルツォフ(B. J. Vladimirtsov)シェスタコフ(D. Šestakov)の教示を斟酌するの機會に惠まれ從來の見解を改訂する所が尠くなかつた。特に碑文の第三行第二語に對する彼の新見解は多くウラジミルツォフに負へる事は其序文に彼が明言する所である。

以下に掲ぐるものは其の抄譯である。尙原文は立論の順序を第四行より始めて居るが、此所には便宜上配列を改めて掲げる事にした。

〔I 1〕成吉思汗の正字法は čingis に非ずして činggis である。

〔I 2〕シュミットは han-u と生格の形に、バンザロフは han-i と對格の形に讀んだ。蒙古語に於て主語は場合により生格の形を採り得る。其は從屬文にして而も客語が與格の形を採る場合に於てのみ許さるゝ法則である。サナン・セチェンに Sidurgu hagan-u mogai bolon hobilhoi dur……「シヅルグ可汗が惡人に變つた後……」の如き其例である。併し此法則は本碑文の場合には適合し得られない。蓋し其客語 boga orgai horiksan は右條件を具へないから。他面碑文の示す古文字的特徵は十分之に han-i なる讀方を與へ得るだらう。(〔III 1〕參照)

〔II 2〕コピーの示す限り、シュミットの讀方は正しい。irhe なる語はアルグン汗の書翰第二十行に erhe「政府」の意味に於て示されて居る。之に對しバンザロフの讀方 irgen が原文に相異する事は、〔IV 1〕Isuńke の語尾と比べて明瞭である。

〔II 3〕本語は其頭部を龜裂の爲に破摧されて居るが副動詞の語尾 ju を具へて居る事及び文章中に占る位置より次の如き限定を受ける。乃ち Sartagul irhe が成吉思汗の bagoju「歸還して」に先行して自ら經驗した行爲を意味する術語でなければならぬ。此點バンザロフが字母 t を龜裂中に失つたと見做して之に與へた taulju の綴はシュミットの ejeleju「占領して」より遙に原文に適すると思はれる。蓋しサナン・セチェン、アルタン・トプチに於て「征服する」の意味は往々 tagulihu

を以て示されて居るから。

〔Ⅲ1〕シュミットは之を erten-i「古き」と讀んだ。バンザロフは古文字學の法則に合はぬとの理由を以て之を斥け、新に arat-i, 乃至 eret-i の讀方を提出し、此場合に適合す可きものとして前者「人々」を採用した。併し乍らシュミットのコピーもバンザロフのコピーも其の示す所は僅に e, r, t, i の四字母に過ぎない。從つて本語を解して erten-i 乃至 eret-i, arat-i とするには字母の不足を感ぜざるを得ない。尤もバンザロフは「本語の基本線は字母 r の直後に於て引延ばされて居る。之は字母 a が其所に存在する事を示すものである」と說明を加へては居るが、かゝる說明は其に先行して、古代蒙古語の綴字法には基本線の伸縮を以て母音を指示する法則が存した事が證明されねば無意味である。

之に反してラドロフの銅版寫眞は本語の左側に二個の點を寫して居る。一は本語の最初の齒の傍に、他は從來 t と讀まれて居た符號 ᠳ の下端に於てである。頭字母が n である事は之に依て決定される。以下第二字母に想像しうる r、č、第三字母に想像し得る on、t の變化を組合せて、吾人は nron-i, nrt-i, nčion-i, nčit-i の綴を得るであらう。然るに蒙古語に於て n+č, n+r の如き結合は語の初に生じ得ない。是に於て吾人は第二字母を詳細に檢討し直して、其が大きさ・屈折の點に於て Sartagul〔Ⅲ1〕・horiksan〔Ⅲ2〕・gurban〔Ⅳ3〕の r に等しからず又 Činggis〔Ⅰ1〕の č にも異なるを發見し、其所に楕圓の破損した字母 o を認めたのである。本語はかくて noyon-i と讀まねばならない。

是に於て吾人は簡單ながら、碑文中接尾語 i を伴ふ二個の名詞 han-i〔Ⅰ2〕・noyon-i〔Ⅲ1〕の文法的性質に就て一言したい。バンザロフは此問題に關しボブロフニコフ「蒙古カルムーク語文典」四七七節に依據し次の如く言て居る。「han-i 及び arat-i の二語は蒙古語に存する規則に從ひ、形動詞 huriksan「集合したる」の主語として對格の形を採つて居る、之は恰もラテン語に於ける不定形を伴ふ對格に類する」と。かくて彼は碑文の從屬文を Čingis han-i Sartagul irgen tauliju bagoju hamuk moŋgol olos-un arat-i Boga Sučigai huriksan dur ……「成吉思汗がサルタグールの民を征服して歸國し、全蒙古部人がブガ・スチガイに集合し

た時……」と譯し、其所に二個の主語を認めたのである。併し乍らバンザロフが提出した文章論は此場合の説明として不十分である。彼の説明よりすれば、蒙古語の接尾語 i は一般に對格のみならず主格・生格の符號たり得ると云ふ理解を與へるだらう。蒙古語に於て接尾語 i が主格・生格・對格を表はす事は事實である。例へば「ゲセル汗物語」に見える文章

〔1〕 ühin-i bariba.

〔2〕 ühin-i següčin-i miha tasuraju doholang bolba.

に於て、例文一は「娘を捕へた」の意味にして、明かに對格を示す。之に反し例文二に於て其客語 doholang bolba と論理的關係を以て示された ühin-i は、例一に於ると同一の形を具へて居るに不拘、吾人は之を主格に解する。更に següčin-i に至つては生格の意味を認めねばならない。換言すれば例文第二は ühin-inu següčin-u miha tasuraju doholang bolba「娘は股の肉を傷いて跛となつた」と書き變へられる如き是である。併し此等の例は決して無制限に許さるゝ性質のものではない。無論其所には自ら條件が要求されて居る。ボブロフニコフの文典はバンザロフが不十分に引用した條件に對しラテン語の accusativus cum infinitivo との同一を否定しつゝ更に次の限定を加へて居る。「主格が對格の形を採るのは獨り形動詞が位格に相當する場合である」と。かゝる場合、乃ち主語が對格の形を爲し客語が助詞 dur を伴ふ形動詞たる場合に在ては、—此場合其は從屬文でなければならぬ—かゝる從屬文は通常夫々一個の主語・客語を有す可き筈であつて、バンザロフの翻譯の示す如く、二個の主語 han-i, arat-i と二個の客語 bagoju, huriksan を具ふる事はあり得ない。從つてバンザロフにして若し huriksan dur を以て本從屬文の客語なりと見做したとすれば、彼は第二の主語 arat-i の役割を示す事は出來ない。と云つて副動詞 bagoju は當然此の從屬文の客語たり得ないであらう。此事は本從屬文と全く構造を同じくするサナン・セチェン中の次の一節

Čiŋgis han Tangut dur huraju Türmehei bolgasun-i gurban dabhor büseleju egerehüi dur「成吉思汗がタングートに集軍し、ツルメヘイ城を第三回目に攻圍せし時」に徵して明瞭である。

かく考へる時、本碑文中、接尾語 i を伴ふ二名詞

han-i,noyon-i（バンザロフの讀み方に從へば arat-i）は、前者を以て對格の形を採れる主語と爲し、後者は形の示すまゝ其直接目的語と解して正鵠を失はない。

〔Ⅲ2〕從來諸研究者が其の解說に最も困難を感じたのは本語であつた。從つて其解決は碑文の全內容の決定に基石の役割を演ず可きものである。然るに碑石を橫斷する龜裂は本語の眞中を通過して居り、爲に其の決定的解答は永遠に不可能なるを思はしめる。之を boga orgai「凡ゆる不和」と譯したシュミットの說はバンザロフの反駁に會して先づ潰へた。然るに之に地名 Buga Sučigai を認め、續く動詞—彼は之を huriksan「集合する」と解した—と結合して「ブカ・スチガイに集合したる時」と解したバンザロフの主張も其理由は極めて簡單なものに過ぎなかつた。「Buga Sučigai は位格の符號無しに示されて居る。其は此語が動詞 huriksan の前に位置し兩者の關係が明確である」と云ふのが其である。吾人は先づ蒙古語に於て文章中、地名・人名が與格の場合其の位格の符號なしに放置され得るか否かを調べねばならぬ。本文章と文法的構造の酷似する一例がサナン・セチェン中に見受けられる。卽ち Hoorlos-un Naran hagan horin tümen horlas yian abun uktoju Hürihe Hübher degere bailtohoi dur…「ホルロスのナラン汗は二十萬のホルロス人を迎擊せんとて、フリヘ・フブヘルに戰ひし時……」此場合地名 Hürihe Hübher には明に與格の助詞が添へられて居る。今バンザロフの說に從つて derege を省略せんか、本文章は完全に無意味に化するであらう。

他面古文字學的特徵に於てもバンザロフの斷定は再考す可き餘地を持つて居る。乃ち本語の上半—其はシュミット、バンザロフより等しく boga, buga の綴を賦與せられた—に於て、最初の三字母に對しては之に異義を挾み得ないとしても、第四字母に關する限り之に a 以外の讀方を認める事は全然不可能ではない。ラドロフの銅板寫眞は漠然ながら字母 σ を想像せしめて居る。次に本語の下部—シュミットは之を orgai と讀み、バンザロフはシュミットの認めて r とせる字母を完全な綴 či と解し、更に龜裂中に沒したと見做す S を加へて七個の字母 Sučigai に復元した—はラドロフの銅版寫眞に最もよく傳へられて居る。乃ち龜裂中に湮滅した語頭の左側には、前二者のコピーには脫漏せら

れた二個の分別發音符號が正確に保存せられて、本語の頭部にgo又はguの綴を確認せしめて居る。同樣に最後の字母に於ても又 han-i〔I 2〕. noyon-i〔III 1〕の語尾の形に比べて寧ろ r に近きを悟らしめられるであらう。吾人はかくして gočigar, gučigar の形を復元する。然るに古代ウイグル蒙古字の正字法に於て、語頭のgは通常分別發音符號を伴はない事實—碑文中の gučin〔IV 3〕. gurban〔IV 5〕は之を例示して居る—を併せ考へる時右の gočigar 乃至 gučigar は當然男性母音に續かねばならない。

以上の考察の結果、吾人は本語を以て二語と解し來つた從來の見解を全然放棄して之を龜裂により二分せられた一語と讀む可きを主張する。此場合上半 bogt, bogd, と下半 gočigar を接續す可き男性母音として最も適切なるはOである。かくて數種の組合せの中から吾人が bogtogočigar なる綴を特に擇出せんとするものは、其が語根より推して「契約・協定・競技」に相當する語に最も近いと推察されるからである。即ち bogtol「約束」bogtolahu「約束す」bogtogači「相手」「守れる約束」(ボブロフニコフ文法・六八頁)等は bogto を語根とする語であり、又 bogačа → bosa「賭・賭事・競技」bosaldoho「賭る」bogogda → bōgda「賭事」等は之に極めて親近である。余の提出せる讀方はかゝる bogtogači に instrumentalis の助詞 gar の附いた形に他ならない。

本語は續く動詞 horiksan—此語が動詞 horihu「決定する」(コワレフスキー辭書・九五五頁)の形動詞過去形なる事は下述する所である——と結合して文法的に矛盾なき文章 bogtogočigar horiksan dur を形成する。文字通りに譯すれば「競技する所の相手を以て指定する」・「競技に就て理由を指示す」となる。要するに此語句を以て碑文の作者は射擊競技の條件・儀式を叙述したものと考へ得られるであらう。

〔III 3〕シュミットは之を horiksan と音譯し「〔憎惡を〕絶やしたる」と意味を附した。之に對してバンザロフの見解は次の樣である。「蒙古語 horihu は「垣を圍らす・遮斷す・禁止す」の意味こそあれシュミットの說くが如き「阻止す・絶やす」の意味は存しない。此語は huriksan と讀む可きである。huriksan とは「集合したる」の意味にして現今已に廢されて居るが

其派生語より知られる動詞 hurimoi「集まる」(チヤガタイ語 hurimak) の形動詞過去形である」と。碑文は明かに horiksan=huriksan なる綴を示して居る。バンザロフは特に horiksan より huriksan を選んだのであるが果して彼の主張する如く此語に「集まりたる」の意味を認め得るだらうか。先づ此を檢討せねばならぬ。現今蒙古人は horihu=horhu, hurahu の二動詞を持つて居る。 horigul「垣・風よけ・羊小屋」 horim「集會・客・酒宴」 horilta「禁令・概要」 hural「集合・集合地」は此等と同種の一群の名詞である。此等一聯の語の言語學的特徴は [illegible]「場所・矢筒・ポケット」を共通の語根とする事である。此語根は「結合・集合・一全體を形成する集合的部分」の意味を與へる。horihu=horhu と hurahu とは同一語根を有する結果、兩者の意味は極めて近接ではあるが而も同一ではない。前者は後者に比べて、最初に語根 [illegible] より生じた形である。後者は hori+ga+hu → hori + a +hu → hurāhu の順を以て生じた物に他ならない。從つて horihu は「環中に禁錮す・鎖をかけめぐらす・外出を禁ず・境界を定める・說得する」の如き、要するに行動の端緒を意味するに對し、hurāhu は委任相の形を具へて居る丈に「圍遶す・攻圍す・集合す・一つに集結す」の如く、行爲の若干の完結を示すのである。かく觀じ來る時、horiksan=huriksan の形を明確に碑文に示されたる本語は、當然 horihu の形動詞過去形 horiksan たる可く、其の委任相 hurahu ではあり得ない。從つて huriksan に「集合する」の意味を當てんとするバンザロフの見解は到底成立しないであらう。

〔Ⅳ1〕本語はバンザロフ以前の翻譯者により yerunke「全體として」と解せられて居た。凡て其第三字母を r と誤つた結果である。之が字母Sたる事は horiksan「Ⅲ3」の形を參照して明瞭である。吾人はバンザロフの讀方 Isunke の決定的なるに從ふ可きである。

〔Ⅳ2〕本語は從來誰にも完全には理解されなかつた。ワンチコフは、彼の譯文より推して、之に Onon なる個有名詞を認めた如くである。シュミットは Ononodur, Chondodur, Chondojor 三樣の讀方を假定し而も最後の決定は之を保留した。バンザロフは其の提出せる五種の綴 Ontodor, ondodor, onhotor, honhodor, hongodor 中、單に其が彼の歷史的證明に最も適合す

るとの理由で特に hongodor—彼によれば現今イルクーツク縣アラル管區在住のホンゴドール部族は嘗てアルグン河畔に遊牧し、イスンケの隷民に屬して居た—を採る可きとした。蓋し碑文全體の意味上、イスンケ大王の分地を構成す可き蒙古部族名が本語に表現せられて居なければならないとの豫想に立脚したのである。併し乍ら此の解釋は餘りにも原文と背馳する。されば流石にバンザロフも「此語は碑銘中最も多く破損を蒙て居り、頭字母hはtに變形して了つて居る」と辯明せざるを得なかつた。

然るにシュミット・バンザロフ・ラドロフ三者の寫しに於て、本語は其輪廓の描寫に相異が存しない。從つて此等三コピーは原文を正確に寫したものと斷じ得られる。而も本語の各字母の特徴は、此等コピーに於てすら、他の語以上に好く保存せられて居る事は一見明瞭であつて、此點本語を目して「最も破損を蒙れる」とするバンザロフの確信は何ら根據なきものとなる。バンザロフ自身も是認せる如く、本語は確に ontodor=ondodor と讀まねばならない。hongodor, onhotor なる讀方は全くバンザロフの創造に過ぎない。

其は hamuk〔Ⅱ5〕horiksan〔Ⅲ3〕gurban〔Ⅳ3〕gučin〔Ⅳ5〕に於て、字母h=gは孰れも形大に、凸起著しきに參照して肯かれよう。或は又、g、hを區別す可き分別發音符號が本語の中央部に存しない點に於て同樣である。

ontudur-un なる形は名詞の生格形と考へられると同時に形動詞過去形とも見做し得られる。併し乍ら此問題の解決は容易である。と云ふのは、以下に續く語句、即ち本碑文の主文章を修飾する ontuduluga「射中てたり」〔Ⅴ1〕との關係上、形動詞たるを得ないから。ontuduhu と等意義の動詞 ontusuhu「上方に射る、遠方に射る、標的を射當る」が其の對象名詞として ontusuma「箭の飛翔、距離、遠方に射られた箭の飛翔距離」(ゴルスツンスキー辭書)を有するを參照して、同一の意味と關係とを動詞 ontuduhu 名詞 ontudur に認める事は全く可能である。

〔Ⅳ7〕從來 eltčis-dur「使節等により」eliye-dur「惡魔に」altak-dur「軍人に」の三樣の譯が之に與へられて來た。本語の解釋は、先づ其が正確に與格の形に譯される事が第一條件である。此點シュミットの解釋は

不完全たるを免れない。彼は本語を譯して三格の形とはして居るものゝ、其に對應する動詞を脱漏し遂に完全文を構成する事が出來なかつた。最後にバンザロフの altak dur ondulaga に於ても同樣である。彼は動詞 ondomoi に原因形の添尾辭を附して被動詞的に用ひられるとする動詞 onduulamoi を想像し、其過去形 ondulaga「分離された、分割された」を以て與格形の補語 altak dur に應ぜしめ、之に「戰士等に分割せられた＝戰士等を采邑として受領した」の意味を與へたのである。併し乍ら彼の主張する如き動詞形態の不規則な構造と云ふ點を認めたとしても、余は其の altak dur ondulaga なる表現に在て、助詞 dur が全く不適當なるを指摘せざるを得ない。且成吉思汗時代 al なる語は中隊の意義に用ひられた。從つて altak とは之を構成する軍人を意味するとの彼の說は何等根據がない。當時、直接軍人を表はす語は獨り čerig あるのみであつて、（アルグン汗の書翰參照）altak 乃至之に類する語にして「軍隊の單位」「軍隊を構成する一部分」の內容を有したるものは現今ブリャート蒙古語中に一も傳へられて居ない。

他面コピーに關して云ふも、①本語の第三字母 t＝d はシュミット・バンザロフ共に其の環狀線の左端を切斷し右端を基本線に接觸せしめる等甚しく正確を缺いてゐる。字母 t＝d はラドロフの銅版寫眞に在ては他の三通りの使用箇所、Sartagul〔Ⅱ1〕ontudur〔Ⅳ2〕ontudulugа〔Ⅴ1〕を通じ明かに環狀線の一端を基本線より分離する。從つて本語に於て基本線に接續せるかに見える箇所には、別個の獨立符號が識別されねばならない。②最後の字母はSであつて、決してバンザロフの如くKと見做す事は出來ない。其は Cinggis〔Ⅰ1〕hamuk〔Ⅴ5〕の語尾と對照すれば十分である。かくして吾人は本語に aldan「兩手を擴げた距離」の複數形 aldas を認める事が出來る。aldan とは當時よく知られた語で往々射手等は ālda delim「張つた弓の倍の間隔」と續けて使用した。之は「兩手を一杯に擴げた距離」の別の表現に他ならない。（ゴルスツンスキー辭書）

〔Ⅴ1〕本語は碑銘の最後に位置し、從つて本文章を完結する動詞でなければならない。 sinduralgan「追放」と名詞に解したシュミットの譯が此點誤まれる事は已述の如くである。バンザロフは之を ondulaga と

音譯し「分離された、分割された」→「分前に受けた、采地として受領した」の意味を想定した。彼の論據とする所は次の如きである。「語格 on は其派生語より推して對照・特殊性・分離・分配の意を有す。語根 on より動詞 ondomoi が派生し得る事は明かである。之に原因形の添尾辭を附して生ずる ondulamoi は受身動詞の代りに使用される。ondulaga は其過去形であつて「區分された」の意を持つ。現今蒙古人の間に動詞 ondoimoi が「突出す、周圍の物より鋭く分離す」を現して居る事は之を證明するだらう。ondoimoi の語根 ondoi は ondomoi の語根 ondo に i を附したもので物體の外部の靜止を示す」と。

バンザロフの此見解は彼の豫想する碑文の內容に餘りにも附會するものである。成る程蒙古語 ondoihu には確に「突起す、膨れる、上に突出す」の意味が在る。併し乍ら「外部に向つて何物かの分離・排出」乃至「平面上に存する明確な物體」の意味を與へる語根は ondo であつて決してバンザロフの主張するが如き ondoi ではない。ondoi には反つて別に「空虛な、些細な」の意味がある。ondoi hooson yabuhu は「何物にも達しない、何物をも受取らない」を現はす。(ゴルスツンスキー辭書)されば動詞 ondoihu が現存せざる ondulahu の意味內容を如何にして間接に說明し得るだらうか。殊に其意味が「采邑として受領する」等といふ事がどうして決定し得られるか。縱令一步讓つて ondoihu 乃至 ontoil-gahu「別にする、脇に置く」を以てしても「相續財產の分配」「采邑の分配」などの意味は掬取り得ないのである。更に又 ondulaga を分析して "語根 ondu + 原因形添尾辭 la + 過去形接尾辭 ga" と爲すを見ればバンザロフは本語を以て形動詞過去乃ち「過去の不完了形」と認めたに相異ない。果して然りとすれば、シユミットの sinduralgan に對してバンザロフの提出した反駁「碑銘の最後には動詞が來ねばならぬ。蓋し蒙古語に於て名詞は常に完全文を完結しないから」は其まゝ彼自身にも適用さる可きである。蓋し語尾形とも完全文形とも認め得られぬかゝる語形を以てすれば、本碑文は無敎養な者乃至蒙古人に非る者の手に作製されしを想はねばならないから。

本語は其上部 ont=ond と下部 laga がはつきりして居る爲に多少不分明な中間部を回復する事が出來る。

然りlの前にu、uの前にt=dᠳの字母は比較的容易に認め得られる。最後に此のtᠳとontの最後の字母ᠳの間に延びて居る基本線の上に剝落した半楕圓の跡が辛うじて識別し得られる所から、吾人は此所に字母o=uを復元し得るであらう。

古文字的特徴を辿つて吾人はこゝにontudulagaなる語を得た。此語は疑もなくon「距離」とtusuhu→tuduhu「命中す」の二部より構成されて居る。ontudulagaは現今の動詞ontuduhuの完了形ontuduluga（口語のoutudala, ontumā）に等しく、「命中した、到達した、射當てた」の意である。アラルスク、ツンキンスク方言には現に狩獵競技に關する特殊な表現saga tudahu「的に箭を射る」（ボドゴルブン スキー辭書）が在るし、又ontusuksan somon iyar sanāksan i ülü onohu「上方に（遠方に）發射された箭を以てしては所望の目的は得られない」の句（コワレフスキー辭書）の如き其の一例を提供する。

以上ラドロフの銅版寫眞を基として考證した結果、私は碑文の全語に次の音譯を與へるに至つた。

Činggis han-i
Sartaguł erhe tagulju bāguju hamuk moṅgol olosun noyon-i bogtogočigar(?) horiksan dur
Yisuṅke outodor-un gurban jaguu gučin tabun aldas dur ontuduluga

（譯文省略）

是が所謂「成吉思汗碑石」上の碑銘なのである。

〔附　記〕

本稿を草するに當り、羽田先生・梅原先生より貴重なる御教示と資料とを種々頂戴する事を得たのは何よりの幸であつた。附記して以て感謝の意を表はす次第である。

亦バンザロフの所論に關しては、筆者は直接其の論文に當る便宜を持ち得ず、僅にクリユーキンの論文を通じて其大略を窺ふに止まる始末であつたが、偶々播磨楢吉氏の邦譯の發表に接し、多大の參考の便宜を蒙つた。併せ記して謝意を述べなければならない。

チンギス・カン碑文拓本（京大文學部東洋史研究室藏）

圖版第三